

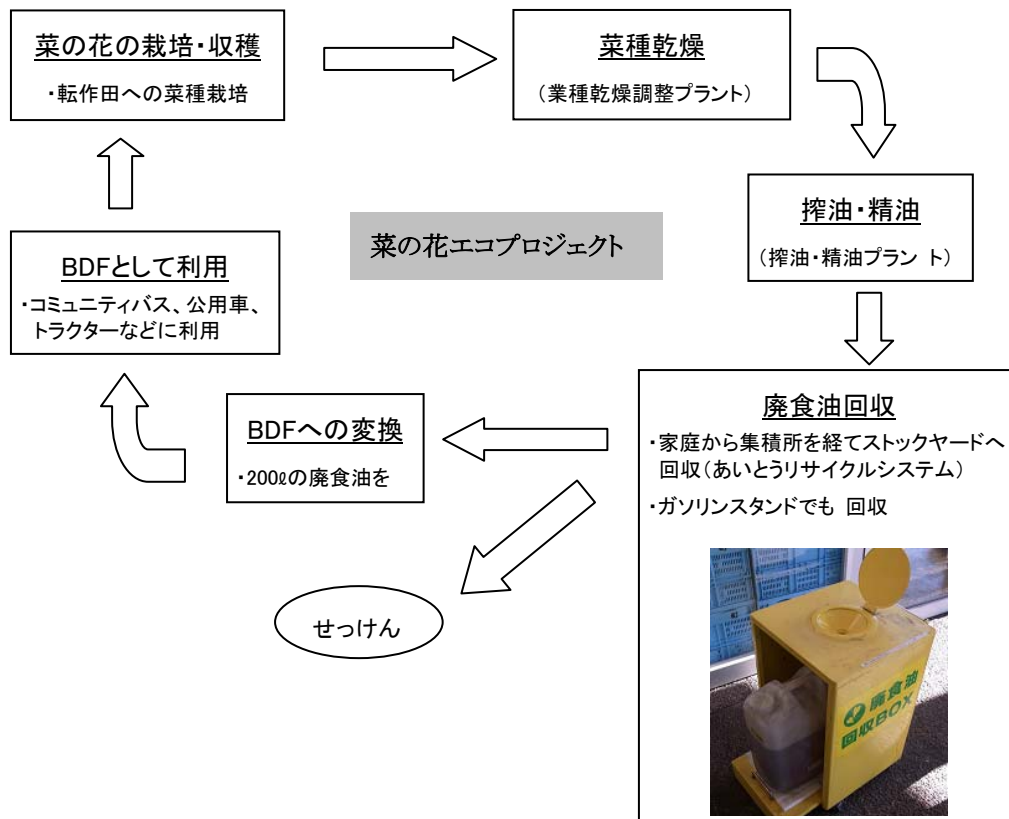
菜の花プロジェクト

(1) 概要

- 菜の花の栽培とそれによって得られる資源を地域内で有効的に活用することで、「地域自立の資源循環サイクル」を構築する取組。
 - 地域での取組は 1970 年代後半の琵琶湖の水質悪化を契機とした「せっけん運動」と並行して広がった「家庭から出る廃食油を回収して、せっけんへリサイクルする運動」が始まり。
 - 「無リンの合成洗剤」の普及に伴い、せっけんの使用量低下が生じ、これに代わる廃食油の新しいリサイクルの仕組みとして、ナタネを原料とする化石代替燃料バイオディーゼル燃料化スタートした。

(2) 取組体制

- 本取組は、立ち上げ当初より、地域住民、消費者団体（環境生協）、行政（市町村、県）などの様々な主体が関わっている。



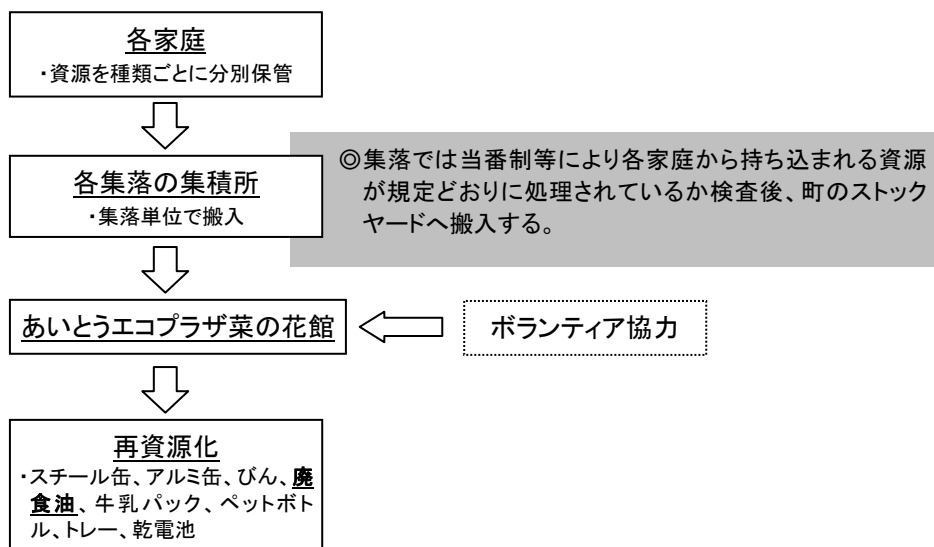
(3) 現状の成果・実績

① 取組の経緯

- 1989年 環境生協の立ち上げ後、1990年代より廃食油の燃料化に始めて取り組む。
 - 東京の染谷商店の協力も得る。
- 1998年 「菜の花プロジェクト」を立ち上げる。
 - 全国展開を図るため、知り合いなどに相談の結果、サミット開催を検討する。
- 2001年 全国菜の花サミット（新旭町）の開催を契機に、団体としての「菜の花プロジェクトネットワーク」を設立した。
 - 当時、380名の会場に500名ほどが来場したほか、超党派の議員連盟が結成されるなどの反響があり、以後、毎年菜の花サミットの開催を通じた取組成果や体験の交流を行いつつ、参加団体が増えている。
- 2005年1月 「あいとうエコプラザ 菜の花館」オープン
- 2009年7月 第9回全国菜の花サミット in 東京を開催（永田町）
- 2010年2月 第10回全国菜の花サミット in 田原を開催（愛知県田原市）

② あいとうリサイクルシステム

- 本取組のポイントの一つであるといえる廃食油回収については、地域住民が協力している資源回収システムの一つとして取り組まれている。
 - この仕組みは1986年より開始されたもので、月1回の回収としている。1986年当時は、びん、アルミ缶、スチール缶、廃食油、乾電池が対象であり、後に牛乳パック、ペットボトル、トレーの回収が加わった。
 - なお、町では1981年から、びん、アルミ缶、廃食油の回収（年1回）を行っていた。

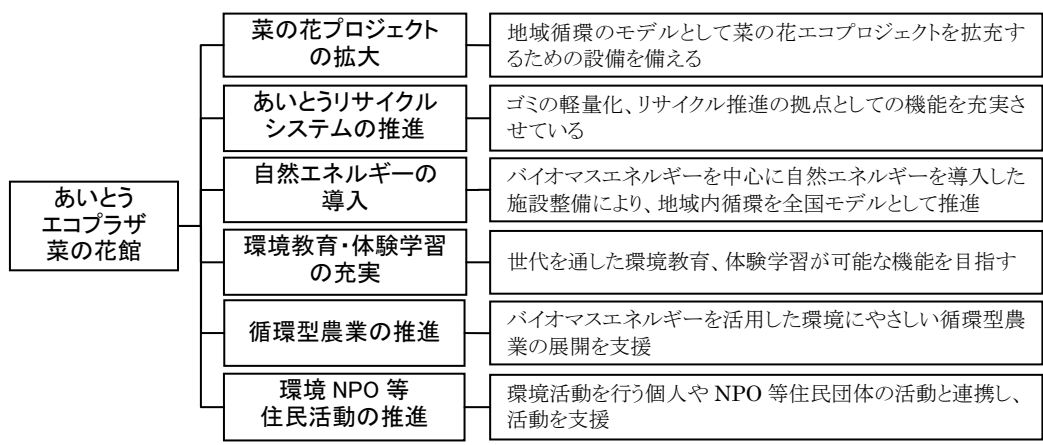


③ あいとうエコプラザ

- 資源循環型の地域づくりを進める拠点施設として 2005 年 1 月にオープンした施設で、以下のプラントがあるほか、屋根には太陽光発電を設置している。
 - 総事業費は（用地、設計管理を含む施設整備費、自然エネルギー設備費を合わせて）約 4.9 億円となっており、施設整備費の 55%が農林水産省（バイオマス利活用フロンティア整備事業）と滋賀県（ゼロエミッション型農村整備事業）の補助金、自然エネルギー設備費の 50%が NEDO（太陽光発電新技術等フィールドテスト事業）の補助金となっている。

- 廃食油からバイオディーゼル燃料（BDF）を精製するプラント
- 収穫した菜種を乾燥するプラント
- 乾燥した菜種から油を搾るプラント
- 籾殻を炭化するプラント

- このようなプラントや併設する展示・学習施設等を用いて、以下に挙げる機能を持っている。



（出典） あいとうエコプラザ菜の花館ホームページ

図 あいとうエコプラザ「菜の花館」が持つ機能

④ バイオマスニッポン総合戦略のモデルプロジェクト

- 2002 年 3 月 バイオマスニッポン総合戦略の策定にあたり、菜の花プロジェクトがモデルプロジェクトとして取り上げられた。



あいとうエコプラザ



あいとうエコプラザ内の施設(バイオディーゼル プラント)

(4) 事業のポイント

① 成功のポイント

- 本取組を通じた地域循環圏推進のためのポイントは以下のとおりである。
 - 地域で取り組むことができるテーマをもとに、地域の知恵やアイデアをどこまで出して、どこまで取り込むことができるか。
 - 農業などの第一次産業がどれだけ成立していくか。
 - 地方公共団体のバックアップがどれだけ可能か。
- 特に地域のキーパーソンと行政施策がうまく連携することにより、取組が機能する。
 - 行政主導の取組の場合、担当者が変わることによって取組が終わってしまう可能性がある。（そういった事例もよくある。）
 - 取組の立ち上げはどのような形でもよいが、様々なステイクホルダーが関わっていけるような形が望ましい。
- BDF 燃料については、小規模、地域分散型自立が望ましい。
 - エタノールのように大規模なプラントを抱えた場合、将来的にどのように維持していくか、どれだけ利用を確保していくかなどが課題となる。
 - BDF 燃料の用途は、公道で使わないもの（トラクター、コンバイン、船舶、発電など）にターゲットを絞ることで、代替可能なものを探っている。
- 取組を継続的に進めていくためには、ボランティアではなく「業」として成立させることが重要である。
- 取組にあたっては、リーダーを含めて楽しく取組に参加していることが重要である。
- 国内での展開に当たっての問題意識をまとめると、以下のとおり。
 - 地域資源全体の活用を考えた循環型のプロジェクトは意外と少ない。堆肥の取組なども局地的なものが多い。
 - 地域住民にとっても楽しい取組とするべきである。（菜の花プロジェクトでは、菜の花が満開の時、イベントや特産品の販売を行っている。）
 - 農業従事者＋地域内企業の所得確保も取組を進めていく上での重要なポイントの一つである。

② 苦勞した点

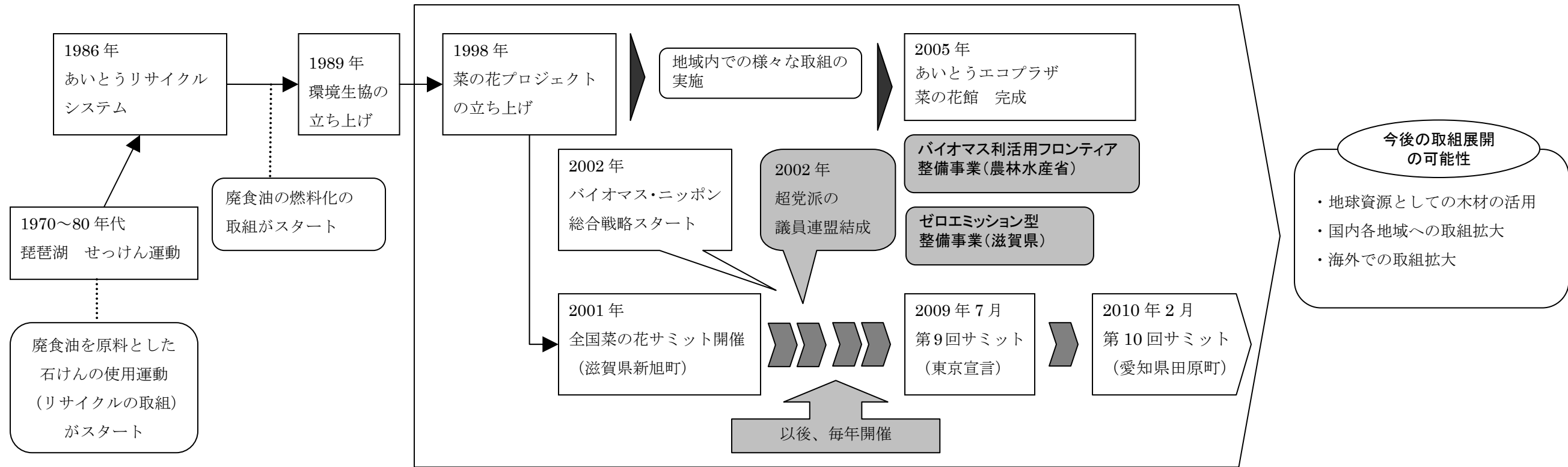
- バイオ燃料については、品質確保法（揮発油等の品質の確保等に関する法律の一部を改正する法律案に対する附帯決議）への対応があった。
 - バイオ燃料の混合割合などについての規制が含まれている法律だが、菜の花プロジェクトのような地域循環を促進する取組については「支援体制充実」する旨を附帯事項の中に盛り込ませることで対応した。
- 本取組では、地域資源・人的リソースについては、町内ですべてを賄うことが出来なかったため、県内事業者までを取組の範囲として捉えた。

- 菜種油については、市内の学校給食への活用が期待されるが、コスト面から恒常的に活用するまで至っていない。

(5) 今後の展開・課題

- 従来、愛東町を中心に取組を進めてきたが、市町村合併に伴い東近江市となったことから、合併前の各市町村域をつなぐ取組を進めている。
 - 地域の森林組合の木を家の材料や暖房燃料として活用する取組。
- 政権が変わり、農家には戸別所得補償制度の導入が検討されているが、その中で菜種も対象の一つとして挙げられており、今後の動向に注目している。
- 国内では、すでに 160 地域が本プロジェクトに関わっているが、行政のみでは関わりづらいのが実情である。
- 菜の花プロジェクトについては、海外（モンゴル、韓国、中国、ウクライナなど）にも展開している。

(事業実施のフロー図)



【事業概要】

- 菜の花の栽培とそれによって得られる資源を地域内で有効的に活用することで、「地域自立の資源循環サイクル」を構築する取組。
 - 地域での取組は1970年代後半の琵琶湖の水質悪化を契機とした「せっけん運動」と並行して広がった「家庭から出る廃食油を回収して、せっけんへリサイクルする運動」が始まり。
 - 「無リンの合成洗剤」の普及に伴い、せっけんの使用量が低下が生じ、これに代わる廃食油の新しいリサイクルの仕組みとして、ドイツの「ナタネ油プログラム」を参考にした取組。
- 地域における菜の花の栽培・収穫から、菜種油の搾油・精油とその利用、廃食油の回収、BDFへの変換とその利用という一連の取組がサイクルとなっている。

【ポイント】

- 本取組を通じた地域循環圏推進のためのポイントとして、地域で取り組むことができるテーマをもとに、地域の知恵やアイデアをどこまで出して、どこまで取り込むことができるか、農業などの第一次産業がどれだけ成立していくか、地方公共団体のバックアップがどれだけ可能か、といった点が挙げられる。
- 特に地域のキーパーソンと行政施策がうまく連携することにより、取組が機能する。
 - 行政主導の取組の場合、担当者が変わることで取組が終わってしまう可能性がある。
- BDF燃料については、小規模、地域分散型が望ましい。
- 取組を継続的に進めていくためには、ボランティアではなく「業」として成立させることが重要である。
- 取組にあたっては、リーダーを含めて地域住民が楽しく取組に参加していることが重要である。